



“唾 天は汚さず 己を汚す” その貧しさとは？

東京学芸大学名誉教授 理学博士

藍 尚 禮

“六月に蝉の声を聞いたよ”と暑い日が十日ほど続いた東京、さらに六月中に梅雨明け宣言。蝉が自然の飛脚便としての役割を見事果たしてくれたと云うところか。人間もまた、生きものの仲間として自然の移り変わりに、その恵みと美しさ、時に厳しさを受けながら、愚直に生きて来た筈である。しかし、平年より二十日以上も早い梅雨明け、加えて梅雨は北海道には“ない”と教えられて来た筈が、梅雨前線が北海道上空に停滞と云う異変で、石狩川が氾濫すると云う程の大雨。何か我々が過ぎてきたこの国の四季の変化は遠い昔のことになってしまったのだろうか。私の子供の頃、強い陽射しで、“日射病”にやられぬよう親たちは気をもんでいたが、昨今の自然は日射だけでなく高温のため熱射病と名を変えて、時として人命を奪う程の恐ろしい高熱地獄を人間生活の中にねじ込ませてきた。確かに体感的な印象ではあるが、体温を遥かに超えてしまう高温、そして気象の激変に伴う竜巻、集中的かつ局所的な豪雨、だらだら続く長雨と経験したことのない状況が今日身のまわりに襲いかかっている。多くの人命を奪い、家屋、家財を容赦なくもぎ取ってゆく自然の力は、平和な穏やかで思いやりのある日本の風土を全く無視して猛威をふるっている。気象庁の発表の中で、“自分の命は自分で守るように”と絶叫にも似たアナウン

スメントが流れてくると云う今日の気象の異常さには恐怖すら感じ、一体これは誰の仕業なのだろうと考えてしまう。世界でも稀なほどのこの国の四季の美しさ、見事さを根底からひっくり返す昨今の気象異変は、我々の手から容易にそれを奪っている。その様に“考え”をめぐらせてくると“今年の六月の蝉の声”は、ある意味不吉な自然の暗転を教えてくれているのではないかとさえ思うのである。

ここでふと思い出した「言葉」がある。紀元六十四年頃のこと、インドから伝えられ中国の二人の僧侶によって書き残された言葉である。“唾、天を汚さず 汚れ己に還る”というのがそれである。釈迦の言葉を伝えているとも云うのであるが、我々の教えられた“諺”の中では、“天に向かって唾を吐く”というものではないだろうか。“自然に逆らう輩には天罰が当たるぞ”と云う訳。われわれにとっても大切な惑星“地球”は、その表面に“自然”という“環境”を長い時間をかけて創ってくれたのである。そして人間を始めとして現存する生きものを大切に育ててきた自然。しかし、イギリスで起こった“産業革命”は人間の生きる上での“利便性”と“多様性を創造”し、進展のため容易に手に出来る地下資源 殊に石炭・石油を利用したのである。それも莫大な量を、そしてそれが無秩序にすすめられてきた結

果が今日をつくりだしたのである。それは、素晴らしくと称賛する声の半面、大変な禍の因をつくり出してしまったのではないのか？と気付くのである。昨今、西暦二千三十年つまり今から十年余り後には、北極・南極の氷は皆無となるであろうとの予想をする者さえ現れた。水面の上昇、水没する国家。それは大量につくり出された二酸化炭素による温熱効果、それに起因する気候変動の異常。われわれがおびえる短期的な激変で、気象の変化はどうか？これに国際的な討議を繰り返す中で厳しい約束と考えを勧めなければ地球は滅亡すると云う危機感をあらわにした。しかし、“自国のみの利益を守る”考え方からはどうして“約束”はたなざらしとなる。地球の未来を考え、地球のもつ自然の恩恵を授けながら生命をはぐくむと云う当たり前前の最も初歩的な話し合いすら持てない現在、私は汗をふきふき不可逆的自然の崩壊の時を待つ知恵しか持ってはいない。また、石油に

よって作り出された便利この上ないプラスチック。海に放り出された後の禍は、海に棲む生きものの生命を奪い、自然のいとなみに大きい恐怖をさそっている。カリブ海に接する国の海岸に漂着したプラスチック碎片は、生命を生んでくれた海を汚し、生きものをいずれ絶滅の途へとさそうことになる。天空を汚し、海洋を汚し、穏やかに住む人々の国土をもぎ取ってゆく悪魔、その悪魔を自ら作り出している人間。それに果たしてどれ程の人が気付いているのだろうか。快適に走り去る舗装された道、そこに降り注ぐ紫外線いっぱいの光。ただただ額や首の汗をぬぐい、澄み切った空を見つめる人間。この惑星に共に生きている以上、一刻も早く地球環境の大切さ、それを守ることに深く考えを致さなければ、すでに手遅れになっているのだ。おそらく、次の世紀は無い筈だ。まさしく天を汚すことは、己を汚すことなのだ。